



十勝川治水100年
トークリレー ⑦

二人三脚で築いた生産基盤

治水事業100年を顧みま
すと、それは開拓の夢を追い
続け、いかなる災害にも打ち
勝ってきた十勝の歴史と重な
ります。

十勝の「母なる川」である
十勝川に始まり、支流の首更
川、札内川、利別川、さらに
その支流を支える河川の治水
事業が進んできました。私ど
も帯広市川西地区で言うと、
戸蔭別川などの開発です。こ
うして現在、肥沃(ひよく)
で広大な十勝の25万畝が存在
しています。100年の治水
とともに、農業の二丁目一番
地である耕作農地が開拓され
てきました。開拓黎明(れい
めい)期から考えると、実に
感慨無量です。
治水に関して回想されるの
が1981年に、当時の鈴木

十勝地区農協組合長会会長 有塚利宣氏



善幸首相が掲げた「増税なき
財政再建」の下、発足した第
2次臨時行政調査会です。行
財政改革で農業予算の大幅方
ツトが危惧される中、現場視
察で太田寛一さんと中川一
さんが、調査会長を務めた土
光敏夫さんを暗渠(きよ)排
水の現場に連れてきて、上流
から下流に流れる地下水の存
在、農地の基盤整備の重要性
を説かれました。土光さんは、
農業には絶えず自然の脅威
があり、近年は地球温暖化に

よる気候変動が見られます。
北海道でも2016年には3
回の台風の影響により、十勝
川の各支流など河川が氾濫
し、未曾有の災害が発生しま
した。

農業と治水は二人三脚で強
力な生産基盤を築いたと言え
ます。国内の農業を世界から
守る趣旨の食料・農業・農村
基本法が、自国の国民の命を
守る法律へと改定されようと
する中、農業現場において治
水事業は改めて大切になって
います。今こそ原点に立ち返
つてその歴史を振り返り、今
日のあるべき姿をさらに求め
たいと考えています。

◆ 十勝川の治水事業は今年、
100周年の節目を迎えた。
治水事業と関わりのある関係
者の思いや将来に向けたメッ
セージを紹介する。

(随時掲載)

十勝川治水100年記念事業

トークリレー



十勝地区農業協同組合長会 会長
有塚 利宣 氏



十勝毎日新聞
令和5年4月23日 2面 掲載

